

デジタルリマスター版

# シヤンタル・アケルマン映画祭

## Chantal Akerman 4.29<sup>fri</sup>-5.12<sup>thu</sup>

4月29日(金・祝)	12:05	オルメイヤーの阿房宮	14:40	囚われの女	17:00	私、あなた、彼、彼女
4月30日(土)	12:05	ジャンヌ・ディエルマン	16:20	オルメイヤーの阿房宮		
5月1日(日)	12:05	囚われの女 ★TALK EVENT(上映後)	15:00	ジャンヌ・ディエルマン		
5月2日(月)	12:05	アンナの出会い	14:40	ジャンヌ・ディエルマン		
5月3日(火・祝)	12:05	囚われの女	14:40	私、あなた、彼、彼女	16:30	オルメイヤーの阿房宮
5月4日(水・祝)	12:05	ジャンヌ・ディエルマン ★TALK EVENT(上映後)	16:20	オルメイヤーの阿房宮		
5月5日(木・祝)	12:05	アンナの出会い	14:40	囚われの女	17:00	私、あなた、彼、彼女
5月6日(金)	12:05	囚われの女	14:40	ジャンヌ・ディエルマン		
5月7日(土)	12:05	ジャンヌ・ディエルマン	15:45	アンナの出会い		
5月8日(日)	12:05	オルメイヤーの阿房宮	14:40	ジャンヌ・ディエルマン		
5月9日(月)	12:05	囚われの女	14:40	私、あなた、彼、彼女	16:30	アンナの出会い
5月10日(火)	12:05	ジャンヌ・ディエルマン	15:45	オルメイヤーの阿房宮		
5月11日(水)	12:05	アンナの出会い	14:40	囚われの女	17:00	私、あなた、彼、彼女
5月12日(木)	12:05	オルメイヤーの阿房宮	14:40	ジャンヌ・ディエルマン		

※予告編上映は5分程を予定しております

## Information

### ★トークイベント開催!

5月1日(日) 12:05 『囚われの女』上映後  
登壇者: 坂本安美さん (アンスティチュ・フランセ日本 映画プログラム主任)

5月4日(水・祝) 12:05 『ジャンヌ・ディエルマン』上映後  
登壇者: 斉藤綾子さん (明治学院大学 教授)

お得な全国共通特別鑑賞券 ¥1,100(税込) 発売中!

オリジナルポストカード2枚付 (数量限定) ※5作品のどの作品でもご利用いただけます。



鑑賞料金 (税込)

当日一般: ¥1,900 / 大学生: ¥1,500 / 高校・中学生・シニア: ¥1,000

毎週水曜サービスデー: ¥1,200

TCGメンバーズカード会員割引: いつでも ¥1,300、火・木曜 ¥1,100

\*オンライン・劇場窓口にて各作品の日時・座席指定券は、ご鑑賞日の2日前より販売

テアトルシネマグループ

ヒューマンラスト シネマ渋谷

全席指定・各回入替制

03-5468-5551 | ttcg.jp

JR各線・東急各線・京王線[渋谷駅]より、明治通を原宿方面に徒歩7分  
東京メトロ[渋谷駅]B1番出口正面



映画に革命を起こした女性監督の代表作、  
デジタルリマスター版で日本初公開!

# Chantal Akerman

デジタルリマスター版

## シヤンタル・アケルマン映画祭

私、あなた、彼、彼女  
Je Tu Il Elle

ジャンヌ・ディエルマン ブリュッセル1080、コメルス河畔通り23番地  
Jeanne Dielman, 23, quai du Commerce, 1080 Bruxelles

アンナの出会い  
Les Rendez-vous d'Anna

囚われの女  
La Captive

オルメイヤーの阿房宮  
La Folie Almayer



主催: マーメイドフィルム 配給: コピアホア・フィルム 宣伝: VALERIA 後援: 在日フランス大使館、アンスティチュ・フランセ日本

COPIAHOA FILM VALERIA CINEMATEK FOUNDATION CHANTAL AKERMAN

chantalakerman2022.jp

4.29<sup>fri</sup>-5.12<sup>thu</sup>

「時間が過ぎ行くのを感じさせるのは映画において最も大切なことのひとつだ」  
ありきたりにも響くこの言葉を残したシャンタル・アケルマンは、今回まとめて上映される5本の作品によって、  
その深遠なる意味を私たちの中に響かせることになるだろう。

砂糖を貪る、じゃがいもの皮を剥く、セーターを脱ぐ、ハイヒールを響かせて歩く、歌を歌う、髪を解き煙草を吸う、  
彼女たちの、彼らの日常の仕草、ささやかな物語がまさに時間とともに、より大きな物語、歴史の大河へと流れ出していく。

眩暈を起こさせるほどに欲望する他者とは交われどもすれ違っていく。

しかしそのすれ違い、他者への跳躍こそが、私たちを、  
そして歴史を作っていることをアケルマンの映画は、親密さとともに確認させてくれる。

坂本安美(アンスティチュ・フランセ日本 映画プログラム主任)

# Chantal Akerman

シャンタル・アケルマン

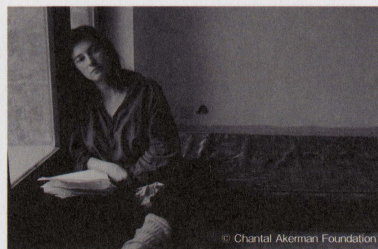


1950年6月6日、ベルギーのブリュッセルに生まれる。両親は二人ともユダヤ人で、母方の祖父母はポーランドの強制収容所で死去。母親は生き残ったのだという。女性でありユダヤ人でありバイセクシャルでもあったアケルマンは15歳の時にジャン＝リュック・ゴダールの『気狂いピエロ』を観たことをきっかけに映画の道を志し、18歳の時に自ら主演を務めた短編『街をぶっ飛ばせ』(68)を初監督。その後ニューヨークにわたり、初めての長編『ホテル・モンタレー』(72)や『部屋』(72)などを手掛ける。ベルギーに戻って撮った『私、あなた、彼、彼女』(74)は批評家の間で高い評価を得た。25歳のときに平凡な主婦の日常を描いた3時間を超える『ジャンヌ・ディエルマンブリュッセル1080、コメルス河畔通り23番』を発表、世界中に衝撃を与える。その後もミュージカル・コメディ『ゴールデン・エイティーズ』(86)や『囚われの女』(99)、『オルメイヤーの阿房宮』(2011)などの文芸作、『東から』(93)、『南』(99)、『向こう側から』(2002)といったドキュメンタリーなど、ジャンル、形式にこだわらず数々の意欲作を世に放つ。母親との対話を中心としたドキュメンタリー『No Home Movie』(2015)を編集中に母が他界。同作完成後の2015年10月、パリで逝去。

## 『私、あなた、彼、彼女』

Je Tu Il Elle

監督・脚本: シャンタル・アケルマン 撮影: ベネディクト・デルサル  
出演: シャンタル・アケルマン、クレール・ワティオン、  
ニエル・アレストリュブ  
1974年/ベルギー・フランス/モノクロ/86分



アケルマン自身が演じる名もなき若い女がひとり、部屋で家具を動かし手紙を書き、裸で砂糖をむさぼる。部屋を出た彼女はトラック運転手と行動を共にし、訪れた家で女性と愛を交わす……。撮影時24歳だったアケルマンによる“私”のポートレイト。殺風景な空間と単調な行為が彼女の閉塞感や孤独を際立たせ、激しく身体を重ね合うことで悦びがドラマティックに表現される。観客は彼女の道程を緊張感を持って見つめることによって、その“時間”を彼女と共有する。

## 『ジャンヌ・ディエルマン ブリュッセル1080、 コメルス河畔通り23番地』

Jeanne Dielman, 23, quai du Commerce, 1080 Bruxelles  
監督・脚本: シャンタル・アケルマン 撮影: バベット・マンゴルト  
出演: デルフィーヌ・セリグ、ジャン・ドゥコルト、ジャック・ドニオル＝ヴァルクロース  
1975年/ベルギー・カラー/200分



ジャンヌは思春期の息子と共にブリュッセルのアパートで暮らしている。湯を沸かし、ジャガイモの皮を剥き、買い物に出かけ、“平凡な”暮らしを続けているジャンヌだったが……。アパートの部屋に定点観測のごとく設置されたカメラによって映し出される反復する日常。その執拗なまでの描写は我々に時間の経過を体感させ、反日常の訪れを予感させる恐ろしい空間を作り出す。主婦のフラストレーションとディティールを汲み取った傑作。ジャンヌを演じるのは『去年マリエンバートで』(61)『ブルジョワジーの秘かな愉しみ』(72)のデルフィーヌ・セリグ。

## 『アンナの出会い』

Les Rendez-vous d'Anna

監督・脚本: シャンタル・アケルマン 撮影: ジャン・パンゼ  
出演: オーロール・クレマン、ヘルムート・グリーム、マガリ・ノエル  
1978年/ベルギー・フランス・ドイツ/カラー/127分



最新作のプロモーションのためにヨーロッパの都市を転々とする女流映画監督を描く、アケルマンの鋭い人間観察力が光る一本。教師、母親、母親の友人らとの接触を挟みながら、常に孤独に彷徨い歩く主人公アンナの姿と、日常に溶け込みはしない断片的な空間と時間を通して、アイデンティティや幸福の本質が絶妙な構成で描き出されている。『パリ・テキサス』(84)のオーロール・クレマン、『キャバレー』(72)のヘルムート・グリーム、『フェリーニのアマルコルド』(73)のマガリ・ノエルとアケルマン作品にしては豪華なキャストが揃う。

## 『囚われの女』

La Captive

監督・脚本: シャンタル・アケルマン 撮影: サビーヌ・ランスラン  
出演: スタニスラス・メラール、シルヴィ・テシュュー、  
オリヴィエ・ボナミ  
2000年/フランス/カラー/117分

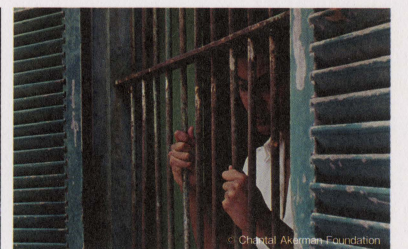
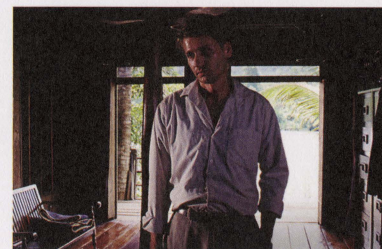


祖母とメイド、そして恋人のアリアヌとともに豪邸に住んでいるシモンは、アリアヌが美しい女性アンドレと関係を持っていると信じ込み、次第に強迫観念に駆られていく。マルセル・ブルーストの「失われたときを求めて」の第五篇、「囚われの女」の大胆で自由な映像化。嫉妬に苛まれ、愛の苦悩に拘束される虜囚の境地をアケルマンは洗練された表現で描写する。ジャン＝リュック・ゴダールの『軽蔑』(63)やアルフレッド・ヒッチコックの『めまい』(58)をも想起させるこの傑作は公開年の「カイエ・デュ・シネマ」ベストテンで2位に選ばれた。

## 『オルメイヤーの阿房宮』

La Folie Almayer

監督・脚本: シャンタル・アケルマン 撮影: レイモンド・フロモン  
出演: スタニスラス・メラール、マルク・バルベ、オーロラ・マリオン  
2011年/ベルギー・フランス/カラー/127分



東南アジア奥地の河畔にある小屋で暮らす白人の男オルメイヤー。彼は現地の女性との間に生まれた娘を溺愛し外国人学校に入れるが、娘は父親に反発するように放浪を重ねていく……。『地獄の黙示録』(79)のもとになった『闇の奥』で知られるイギリスの作家ジョゼフ・コンラッドの処女小説を脚色。時代も場所も明かされず抽象化された設定の中で、狂気と破壊の物語が繰り広げられる。原作の持つ実存主義と家父長制という重苦しいテーマを孕みながらも、アジアの街並みを自在に歩き回る娘を横移動で捉えたカメラが素晴らしく、幻想的なまでに美しい。